

# Report

## ダウンアンダーの国から ⑤

### 大貫映子

日本人ただ一人のプロのマラソンスイマーで、世界の海、湖を泳ぎまくっている松崎裕子さん(31)から、はるばる国際電話があった。夏の間ほとんど毎週20km単位のレースがあったのだという。いつも話を聞く度に、なんてタフな連中がこの世に存在するのだろうかと思ってしまう。

マラソンスイミングというのは、「海などの自然の水場で10マイル(約16km)以上を一人で泳ぎ切る水泳レース」と解釈されている。そして欧米、南米などで行われるレースを転戦するプロ競技が実際に行われている。松崎さんは1992年に世界で約20人しかいないプロのマラソンスイマーとなった。



▲ 最年長完泳者パトリア・スミス  
入院というハプニングもあったようだ。

豪州はマラソン水泳が盛んな国のひとつ。私の住むパースは、1991年に世界水泳選手権で初めて25kmのマラソンスイミング種目が、他の競泳種目と共に開催された記念すべき土地。その上パース出身の女性、シェリー・T・スミス(当時体育教師)が男性を含む全出場者のトップを切ってゴールし、女性の長距離水泳の強さを全世界に示したという歴史がある。残念ながら、日本水泳連盟は全くこの種目に関しては無関心で、一人もエントリーなしだった。

ところで先のシェリーも美容院経営の夫をパースにおいて、東海岸のシドニーへ単身赴任(?)している。経済活動の活発さ、試合の豊富さ、交通の便など、パースに比べるとあちらの方がよいのだろう。プロサーキットの女王の座をキープするため、朝晩合計で6時間の練習をこなし、合間に電話機のセールスをしているという記事を読んだ。スポンサーを獲得することの難しさ、マラソン水泳という種目への理解度の薄さも悩みの種という記事のタイトルは「長距離泳者の孤独」。それでも必ずと言っていいほど、豪州では、女性スポーツの可能性を語る時に例にあげられるスポーツウーマンの筆頭である。本人は大変謙虚に「私ができるのだから、やろうと思えばもっともっと色々な可能性がほかの女性には秘められているはず」とコメントしている。

さて、プロの話の後に気がひけるのだが、私はこうした幅広い水泳の盛んさや、誰もが息長くスポーツを楽しむ環境にもう少し身を置きたくて、豪州で3回目の夏を迎えようとしている。いちアマチュア・マスターズ・スイマーとしてだが、12月以降に海で毎週開かれる1.5km(15kmではありません!!)レースや2月の「ロットネス島チャレンジ20km」を真剣に楽しみたい。「20km」には地元の水泳仲間とデュオ(20分交替で2人で泳ぐ)で出たい。ドーバー海峡最短時間に挑戦中の世界的なスイマー、タマラ・ブルース(18)から地元の多くのレクリエーションスイマーまでが一同に会すローカル大会で大変楽しい。昨年は、総合10位以内の2位と6位に女性スイマーが入った。また、孫もいるパトリア・スミスさん(58)一写真一はソロの部で最年長完泳記録を更新(8時間52分)。女性スポーツの向上は「男性と競う」こととは違うと思うが、こういったジャンルが世の中にもあるということも、もちろん面白い。

#### 〈おおぬき・てるこ〉

82年、日本人で初めて英仏海峡横断水泳に成功。その後、南米のアマゾン川を45日間かけてカヌーで下る。93年7月より夫・増島達夫さん、長男大介くんと共に豪州パースに滞在。95年7月、エディス・カーワン大学人間健康学部(レジャーサイエンス)ポストグラデュエートコース修了。